



TITLE:

郷土と祖國

AUTHOR(S):

臼井, 二尚

---

CITATION:

臼井, 二尚. 郷土と祖國. 經濟論叢 1944, 58(1-2): 52-67

ISSUE DATE:

1944-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/132075>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 經濟論叢

號二・一第 卷八十五第

---

高田博士還曆記念論文集

---

行發月二年九十和昭

## 郷土と祖國

臼井 二 尚

郷土乃至故郷は一般に人の生れた所と解釋されてゐる。斯かる所としての郷土が人間存在に對して如何なる關係を有するかは、郷土の最も根本的な問題であるが、此の問題は人間存在の地域的限定を明かにする事によつて解かれるであらう。然らば人とは抑も何であらうか？ 人が生命の主體なることは言ふまでもないが、此の生命の主體なる規定を更に内容的に進めるならば、思惟・感情・意欲・行動を含めた意味に於ける行爲の主體とすることが出来るであらう。併しながら生命の此等のはたきは一様に動物にも亦認められるところである。従つて行爲の主體としての人が他の動物以上の存在者たり得る所以は、單に行爲する事自體に存するのではなくして、人の行爲の様式が人特有のものである事に存しなければならない。而して人をして人たらしめる人特有の行爲様式は即ち文化であり、人は文化を有つ事によつて單なる自然的存在者の域を超越するのである。生れ出たばかりの嬰兒は未だ人間的行爲様式としての文化を少しも有たないが故に、人の體を具へてはゐても完き意味の人と言ふことは出来ない。嬰兒は長ずるにつれて人間的行爲様式を攝取して之を自己の行爲様式とする事によつて、漸次人と成るのである。此の人と成るまでの人間的行爲様式獲得の過程が即ち「成人」の過程である。「成人」は單に身體の成長のみを意味すべきではなく、それと共に精神が發達して、これによつて人特有の行爲様式たる文化を具有するに至る事を併せ意味すべきである。「成人」を遂げて人として具へるべき行爲様式を一應整へ具へる

に至らざる者は、未だ十分なる意味に於て人とは言はれ得ないが故に、「未だ人と成らざる」[年配の者即ち「未成」]年者と呼ばれるのである。而して人は自己の成人過程に於ける人間的行爲様式の獲得整備を、單獨に總ての文化を作り出す事によつて、一切他人に俟つ事なく、達成するものではなく、その殆ど總てを自らなる模倣又進んで行ふ採擇更に他人の訓育強制等によつて、周囲の人々の行爲又はその所産から攝取するのである。人間的行爲様式としての文化は斯かる攝取によつて既に之を具有する者から、未だ之を具有せざる者に傳達され、此等の人々に共通になると共に存続發展する點に於て社會性あるものであり、此の社會性ある文化的行爲様式を社會に於て攝取する事によつて、初めて眞に人と成り得る點に於て、人は根本的に社會的存在者である。

人間的行爲様式としての文化はその具體的存在に於ては、あらゆる地域の一切の人間に齊一的に共通であるのではない。それは常に特定地域毎に特殊化されつつ具體的形態を執つてゐるのである。凡そ文化は種類乃至領域の差によつて度を異にしつつも、特定地域の住民には共通であると共にそれ以外には及ばざる地域的特殊性を有する。此の事は例へば言語なる行爲様式に就いて見ても直ちに明かであつて、各國に夫々特有の國語があり、夫々の國語は更に地域の異なるに従つて多數の方言に分化してゐる。斯かる差異分化はあらゆる行爲様式に於て認められるところであり、また此の事が一般の人々にとつても自明的であるのは、「所かはれば品かはる」と言ひ、「十里之外風俗不同」といふが如き諺の存在する事によつても表明されてゐる。従つて人が生れて人と成る過程に於て攝取する行爲様式は、何れも斯く地域的に特殊化された文化である。故に人が具體的に如何なる人と成るかは、彼が如何なる地域に於て未成年時代を過し、如何なる特殊文化を攝取するかによつて定まるのである。人の行爲は必ずその人が育ち人と成つた所の内部に於ては共通であると共にその外部に對しては特殊なる様式に従ふ

ものであり、此の人間行爲の地域的場所的限定は正に何人も免る可らざる人間存在の基本的制約の一つである。

如何なる人も只單に人であるのではなくして、必ず彼の行爲様式に於て特定地域の特殊性を帯びてゐる點よりして、その特定地域の人であるが、その地域は即ちその人が育ち人と成つた地域に外ならない。一般に人は自己の行爲様式の大部分特に人として最も基本的な行爲様式を獲得すべき幼年時代には、未だ人として不完全なる爲に獨立して單獨に行動することが困難である故、地域的移動も自ら制限されて、自己の生れ育まれる父母の家庭を中心とする限られた地域の外に出る事は極めて稀である。斯かる事情によつて人は此の限られた地域内に支配する特定行爲様式のみを採つて自己の様式とするのが常である。従つて彼の此の地域への所屬性は極めて明かである。而して人は概ねその生れた所に於てその未成年時代特にその幼年時代を過すが故に、出生の場所なる郷土乃至故郷は、即ち人が自己の人としての基本様式の大部分を獲得して人と成る場所に外ならないのである。或人の郷土とは人間存在の觀點よりすれば、その人をして具體的にその人たらしめる特殊な行爲様式の支配し掌られる地域である。他方また行爲は何等かの對象との交渉を内容として實現されるものであるが、郷土の外に出ること稀なる幼年期の行爲の對象は、殆ど總て郷土内に在るものなる事も言ふを俟たない。而してものの存在の根底には人間存在があり、或ものが何であるかは人が行爲に於てそのものと如何に交渉するかによつて定まる事は、今や存在論が一般に認めるところであるが、人の行爲様式が地域的特殊性を有する限り、此の行爲によつて具體的存在を規定されるものも亦、同様な地域的特殊性を有つ事は當然であつて、人間行爲の様式と對象乃至内容とは常に相關的に地域的特殊性を有するのである。斯くて或人の郷土とは、その人の行爲に特有なる様式及び對象乃至内容の在る場所であり、文化が地域的に分化してゐる限り、何人も自己が幼年時代を過した場所を郷

士として有たざる者はないのである。

人は眞に人と成るまでの間は、狭小なる地域内にあつて、其處に支配する特殊な行爲様式に従つて其處にある特定の對象とのみ接觸交渉を続けるが故に、此の交渉に自ら習熟し、勞少くして大なる效を擧げ得るに至ると共に、此等のものに就いてはあらゆる細部まで知悉領解するに至り、總て此の郷土内のものとは馴れて親しみある關係を有つ。その中でも特に郷土の人々とは、人は自己の獲得した様式の儘に行爲しつつも、誤解や疑惑を蒙り又此等起因する不利衝突に遭ふべき懸念や不安に何等煩はされる事なく、暢びやかさと寛ぎの中に交り得るのである。併しながら人は斯くの如き郷土が自己の生命に對して如何なる意義を有するかを、必ずしも意識してはゐない。人が自己の郷土を意識しその自己に對して有する意義を悟るのは、郷土内に支配する行爲様式に従つて郷土のものと交渉する郷土的行爲即ち人が生れて以來反復し來つた行爲が否定を受け、郷土に於て形成された自己の本性の儘なる生活が不可能になる場合である。人は不斷に大なる氣壓の下にありながら、不斷にその下にがあるが故に却つて氣壓の存在を意識しないと同様に、人が郷土にゐて彼の一切の行爲が常に郷土的様式に規定されてゐる間は、彼は郷土的規定の存在も意識しないのであるが、氣壓が變じて平素の氣壓の下に於ける作用例へば呼吸が困難になる時に、初めて氣壓の存在が意識されると同様に、郷土的なる行爲の困難又は不可能と云ふ否定を媒介として、人は従前無意識的即自的に没入してゐた郷土生活を反省し意識するに至るのである。

行爲の様式と對象とはその具體的特殊性に於ては相關的であるが故に、郷土的なる様式は郷土に在るものとの交渉の様式であつて、従つてそれはその儘直ちに郷土のものとは異なるものとの交渉には適用され難い。故に郷土を反省意識せしめる郷土的行爲の否定は、郷土のものならぬものとの交渉に於て生ずる。此の否定的交渉は郷土

内に居てものその外部から入り來つたものとの接觸交渉に於て經驗されるところであるが、斯かる郷土に於ける非郷土的なるものはその範圍に於ても量に於ても頗る限られてゐるが故に、郷土に於ての郷土の否定は極めて部分的であり個別的なるに止まる。然るに人が一度郷關を出て他郷乃至異郷の人となれば、文化の地域的分化の故に、郷土に於て即自的に馴れ親しんでゐたものは殆ど一切缺如し、此等のものとの交渉の様式たる郷土の從つてまた自己自身の行爲様式がその儘には適用され難く妥當せざる非郷土的なるものとのみ接觸交渉しなければならぬ。茲に於て郷土の否定は全面的且決定的となる。従つて郷土の反省意識は他郷に出る時に初めて眞に明確となり且郷土全體を對象とするに至る。他郷に於て考へられた郷土は即ち故郷乃至「ふるさと」である事は、例へば「ふるさと」は遠きにありて思ふもの」等の句を想起するまでもなく明かであるが、郷土はむしろ他郷に於ける否定によつて故郷に轉化して人の意識に上り易い事は、思郷が故郷を思ふを意味し、又懷郷・鄉愁・望郷等の故郷を對象とする言葉が多く、更に故郷を詠する詩歌の夥しい事によつても表示されてゐる。

他郷に於ける生活は、他郷の行爲様式に従ふべき他郷のものとの交渉に習熟せざる者にとつては、勞多くして效少きは必然的である。而して此の他郷を郷土とする者にとつては、その郷土の從つて自己の様式とは異なる様式によつて行爲する外來者との交渉が、同郷人とのそれに比してまた勞多くして效少きのみならず、外來者はその大なる差異の故に未知不可解なところがあり、不利禍害を生ぜしめるかも知れぬと感ぜられるが故に、外來者は一種の不安と之に伴ふ緊張や不快の原因となり易く、斯かる外來者を忌避し更に増悪敵視する傾向の現れるのも自然の事である。社會の封鎖性が強い爲に行爲様式即ち文化の地域的差異の著しい原始乃至古代の社會に於て、外來者と敵とが同一語を以て表される事の尠くないのは、右の傾向の表現に外ならない。斯くの如く異郷に於て

自己の本性に従ふ種々の行爲が不可能であり、且周圍の總ての人々から嫌忌乃至排除を以て遇せられる時には、何人も寂寥・哀傷・焦燥を禁じ得ざると共に、此の異郷に於ける郷土的行爲の全面的否定を媒介として、人は初めて自己本来の特性が如何なるものであるかを、又此の本性の儘に行爲しつつ勞少くして効多き生活を平和裡に樂しみ得る所が即ち故郷である事を悟るのである。此の時彼が故郷を懷しむの情に堪へざるも亦、地域的限定を負ふ存在者として自然の事であり、同時にまた斯く懷しく貴い故郷を愛護しその發展に盡さんと欲するも當然の事である。誠に懷郷の情も愛郷の念も、共に人間存在の地域的限定そのものに根ざす人間の本性のはたらきであると言はなければならない。

郷土意識及び愛郷心の覺醒が郷土的なるものの他郷に於ける缺如に基づく郷土的生活の否定を媒介とするが故に、郷土意識及び愛郷心の對象となる郷土の内容は、郷土にあつて他郷には無き郷土特有のものである筈である。而して斯かるものは人が幼年時代以來長く馴れ親しんで來たものであるが、その主要なるものは先づ父母の家の近くにあつて日常感性的に接觸し得るものである。故郷と言へば直ちに故郷の山川が聯想されるのは、山川が斯かる感性的接觸の對象中日常不斷に接觸されるものであり、且斯かる對象物を包括してゐるものであるによるであらう。又鎮守の森や教會の塔の如きも特に目立つ風物であるが故に、故郷従つて郷土の内容を代表し又は表徴するものとして、故郷・郷土と聯想され易い。次に郷土に於て接觸交渉を重ね來つた人々も亦重要な内容をなすば當然であつて、*community* の歌はれるのも此の事を示す。更に此等の物及び人と相關的なる特有の文化乃至行爲様式中風俗慣習の擧げられるべきは言ふを俟たない。わけても基本的様式なる衣食住の形式は他郷に在る者の齊しく懷しむところである。而して郷土の内容として郷土意識又愛郷心の對象となる此等のものは



一般的な價値の觀點から選定されたものではなく、出生の地從つて幼少年時代の地に存在したと云ふ價値的選擇、以前の條件によつて定まつたものであるが故に、一般的な價値の標準に照して特に優れたものである事を要しない。又人は郷土の内容と幼時以來接觸交渉を反復するうちに、それに籠る微妙な趣それに潜む隱微な意義を發見し味ふに至るけれども、郷土以外の者は通常斯かる趣や意義に觸れるまでには至り難く、從つて郷土の人々が愛し貴び誇るものも、外部の一般の人々にとつては何等實質的價値なく、彼等は此等のものを些末無意味なものと感ずる場合が尠くない。しかも亦郷土のものとの交渉に馴れざる外部の人々にとつては、郷土のものがむしろ勞苦不快を感じしめる忌はしい存在でさへあり易い。斯かるものを郷土の人々が愛し貴ぶのは、彼が元來此等郷土のものを自己の生の形式及び内容とする事によつて人と成つたのであり、此等のものと幼時から馴れ親しんで來たからであつて、客觀的價値の觀點から評價批判して、此等を愛し擁護するを義務と感ずるが故ではない。郷土を愛は、斯くの如き價値意識乃至義務感情以前の、自我の生命を愛しその形式と内容とを擁護せんとする即自的直接的な生の根本衝動に發する自然的事實である。從つて道德的反省自覺に達せず自然狀態の即自的生活の中にある未開人の、灼熱せる荒蕪の地や荒涼たる氷雪の國に生を享けた者も、齊しくその郷土を愛し之を誇りとしてゐるのである。否生命の形式と内容との地域的限定は單に人間の生命のみに限られた事柄ではなく、あらゆる生命に共通な事實であり、從つて郷土愛乃至懷郷の情は廣く動物界に認められるところである。胡馬朔風に嘶き越烏南枝に巢くふも亦此の衝動の現れである。而して外來者が郷土のものの眞價を悟らず、動もすれば之を蔑視し又嫌忌するは、前述の如く此等のものが外部の人々乃至外來者の生命の形式及び内容とは異なり、又外來者は此等のものを領解熟知し此等のものと馴れ親しむまで交渉を重ねない爲であるが、郷土のものに對する外部の人々

の態度は即ち一般に人が他郷のものに對する態度に外ならず、郷土のものを郷土のものなるが故に愛し貴び誇る態度が、人の本然の性に根ざすと同時に、他郷のものを直ちに蔑視排撃せんとする傾向も亦、地域的限定を負ふ人間存在にとつて自然的な現象である。併しながら郷土及び他郷に對する右の兩態度は共に、郷土に没入し自己の特性のみを以て一切を律する主觀的な立場に立つものなる事は言ふを俟たない。而して眞にものを知るには之を他と比較しなければならぬ。自己を眞に知るには之を自他を併せ包括する客觀の鏡に映さなければならぬ。斯く客觀的に自己を知る事によつて客觀的に働く事も可能になる。郷土愛も郷土を他郷との比較聯關に於て反省批判する態度にまで高められる時に、初めて眞に自覺的な客觀の立場に達する。然らざれば他郷のものを顧ることなしに總ての優れたるものは郷土にありとし、是非を無視して郷土の利のみを最上とする主我獨善の段階を超脱し得ず、夜郎自大の譏を免れない。

一般に郷土にある行爲の様式及び對象は郷土から遠ざかるに従つてその數や純粹性を減ずるのが常であつて、極めて概括的に言へば、郷土と他郷との差異は兩者の距離に應じて増大する。或土地に在る郷土の様式及び對象の量と質とに應じて、その土地に一定の度の郷土性があると言ふことが出来、従つてその土地が一定の度に於て郷土であるとも言はれ得る。此の點よりして幼時の家を中心として、漸次郷土性の減ずると共に地域の廣くなりまさり行く幾重もの郷土圈を分つことが出来るであらう。而して此等幾重もの重疊せる郷土の中、何れが郷土乃至故郷として特に意識に上り愛護意欲の對象となるかは、人が何れの郷土の外に出る事によつて何れの郷土が否定を受けるかによつて定まる。即ち人が或郷土の外に出る時その郷土には在つて現在居る所には缺如する様式に従ひ、またその郷土に特有なる對象と交渉する時に實現されるべき行爲が困難又は不可能になつて否定を受ける

が故に、斯く否定を受ける行爲の様式及び對象の在る所が、此等のものを内容とする故郷として特に意識され懷しまれるのである。

斯くの如く郷土は廣狹種々の範圍に於て考へられるのであるが、いま郷土を最も狭いものから廣いものへと辿つて行く時、内に在つて外には缺如する意味に於て特別なるもの及び内外に普遍的でありながら内のものは外と異なる獨特の限定變容を受けてゐる意味に於て特殊なるものが、外にまで及んで共通なるものに比して特に多く、内と外との差異の極めて著しい大郷土圈に到達する。これ即ち祖國である。祖國が擴大された郷土に外ならぬ事は、*Leimat, home, pays* 等の言葉が、何れも郷土を意味すると同時にまた祖國をも意味する事によつても明かであらう。ただ右に述べた如く祖國の内と外との關係は他の、郷土の内と外との關係に對して格段の差異がある爲に、祖國は郷土の中に於て特異なる位置を占めてゐるに過ぎない。故に先に郷土及び郷土愛に就いて述べた事は、祖國及び祖國愛に就いても言はれ得るのであるが、その一を茲に改めて再說する事は省略する。併し祖國は廣大なる郷土なるが故に、地域の廣大性よりする特殊の限定が認められるのは當然である。斯かる限定の一は祖國の内容に關するものであつて、祖國の廣大なる地域に在るものに齊しく感性的に接觸交渉する事は何人にも不可能なる故、祖國の内容は感性的對象よりも精神財を主とすると共に、無數の祖國に特有なる感性的對象中特に優れて代表的なるものが、詩歌繪畫等によつてあらゆる人々に親しまれ、祖國の感性的内容を構成し、又祖國の表徴ともなる。祖國の名山や祖國特有の名花の如きはその例である。次にまた祖國が意識され更に思慕と愛との對象となるのを媒介する否定に於ても、祖國特有のものが認められる。此の否定の一が、祖國の外に出る事によつて生ずる祖國に特有なる様式と對象との缺如に基づく祖國的行爲乃至生活の否定である點に於ては、祖國も爾餘の

郷土と一致し、此の事は、人が異國に出て「祖國を頼み」る時、自己が如何なる祖國を有し自己が如何に祖國を愛するかを、明確痛切に意識するを常とする事によつても明かであるが、祖國意識の覺醒祖國愛の迸出を媒介する否定には、なほ他の郷土には見られ難い特殊にして強烈なるものがある。それは即ち祖國が外國から受ける壓迫脅威更には戦争による危機である。通常の郷土はその屬する國家の統治權が確立してゐる限り、他の地域集團によつて攻撃侵略を蒙る可能性は少く、從つて郷土意識郷土愛の覺醒は、郷土の急乃至郷土の危機によつて媒介されるよりも、むしろ郷關を出て他郷に於て經驗する辛苦や、或ひは又他郷の人又は物と郷土の人又は物との對立競争に媒介されるを常とする。然るに國際關に於ける強力の行使は之を有效に制御し得る機關が存しないが故に、祖國は外部よりの侵略の可能性に曝されて居り、此の可能性が現實性に轉ずる時に、祖國は危殆に陥るといふ最大の否定に直面し、此の時最も明確且切實なる祖國意識祖國愛が覺醒するのである。これ即ち祖國と云へば祖國の急又は祖國の危機が聯想され易い所以である。外敵の脅威によつて祖國的なものの確固たる存立と自由なる發展とが抑壓破壊に直面する時に、人は今や危殆に瀕せる祖國特有のものが、總て自己の生命の特質をなす形式を構成し又之と相關的なる内容を提供してゐる事を反省意識し、如何に自己の生命が根柢から祖國に依存してゐるかを自覺して、自己の個人我は祖國の大我を基盤とし之と運命を一にするものなる事を痛感せしめられる。從つて此の時人は自己の根柢としての祖國を擁護する事が即ち自己を眞に生かす所以なるを思ひ、祖國の總ての成員は日頃の個別的なる我執對立の一切を棄てて、此等個人我の共通の地盤乃至此等個人我を部分とする全體としての祖國の擁護の爲に、自ら一致團結するに至るのである。日頃の個人的乃至黨派的確執相刻の如きも、皆祖國的规定の下にあるものを旋り祖國的なものを前提としてゐるのであつて、祖國的なものの壊滅の前に

は總て無に等しい事は、何人にも直ちに悟られるところであり、一身一家一黨を忘れて祖國の爲に和協結束するも亦、人間存在の地域的限定よりして自然の事である。

高次の大郷土とも云ふべき祖國は幾つかの低次の小郷土に分たれ、此等の小郷土は更により低次の郷土に分たれるのであるが、祖國內の此等諸段階の多數小郷土と此等を包括する祖國とは、如何なる關係に立つであらうか？ 惟ふに茲には二種の關係が可能である。前述の如く郷土本來の内容は郷土に特有なるものであるが、特定郷土の内容の中その郷土のみにあつて他には全く缺如するその郷土に特別なるものは、他の郷土の者が之と接觸交渉を持ち難き限りに於て、祖國そのものの内容とはなり難い。又郷土の内容にして祖國に普遍的なるものを郷土的に特殊化し限定したのも、その限定が著しい爲にそれが祖國的普遍者に配與する度低く祖國的特性が微少であれば、祖國の内容とはなり難く祖國との聯關に乏しい。斯くて郷土の内容に全く郷土にのみ特別なもの又は祖國的一般性から逸脱するに近いものが多い事は、それだけ郷土特有のもの従つて郷土の内容を多くし、それだけ郷土性を顯著にすると共に、祖國に共通なる祖國の内容をそれだけ少くする事になる。而して斯くの如き郷土にのみ特別なものの擁護發展に向けられた郷土愛は、祖國に連なりかかはる事乏しいものへの愛なる點よりして、郷土的なるものを越え或ひは之を媒介として、祖國そのものの發展に貢獻するに至り難いであらう。故に斯かる内容の多くなるにつれて、郷土と祖國との聯關はそれだけ稀薄にならざるを得ない。従つて此の場合、右限なる存在者として力に一定の限りある人間は、斯かる郷土のみに特有なるものに力を盡すだけ、祖國に盡す力を減ずることにならざるを得ない。茲には正に高田博士の唱へる結合定量の法則が働くのである。斯くて此の場合には郷土と祖國とはその内容及びそれへの愛・結合に於て相反する關係に立つのである。之に反して郷土にのみ

特別なるものが少く、又郷土の特色の豊かなるものが多くても、それは飽くまで祖國に一般的なるものへの配與から逸脱せざる範圍に於て之を郷土的に特殊化してゐるに過ぎない場合には、郷土的なるものは同時に祖國的なものである、郷土内容の發展は祖國内容の豐富化複雑化に外ならない。従つて郷土に盡す事は決して祖國への背反とはならず、むしろその強化擴充となるのである。故にまた此處に於ては郷土への愛乃至結合は祖國への愛乃至結合と對應合致するのである。

祖國と郷土とが相反背馳の關係に立つ場合の一つは、祖國の境界が特殊な地理的障礙なく直ちに外國と接してゐるところに見られ易い。斯かる祖國の周邊に位する郷土には、隣接する外國との間に接觸交渉が生じ易い爲に祖國ならぬ外界の文化が入り込み易く、斯かる文化の多くは國境の郷土に止まつて、それ以外の郷土にまで及び難いが故に、それは祖國の内容をなさず只國境の郷土のみに特別なるものたるに過ぎない。他方又これは外國と共通なるが故に、これを重んじこれを変する限り、此の郷土は此のものが本來屬する外國と利害を共通にし、更には此の外國に結合せんとする傾向をさへ生じ易い事は自然である。猶また斯かる祖國の周邊は往々にして國家歸屬に變動を生じ易く、これと共に、新たに歸屬する國家の文化を受け入れ易いと同時に、以前の文化を部分的に保持して、文化の共通の點よりして部分的に兩祖國に屬しつつ何れの祖國の一部とも見られ難く、従つてまた祖國愛もその向ふところに迷ふ場合も生ずる。例へばエルザス・ロートリンゲンの如く、頻繁なる戦争の度毎に獨佛兩國に交互に歸屬を變更せしめられた所は、政治的歸屬は明確ながら、祖國的歸屬は何れとも決し難い状態に立つことが屢々である。之に反して祖國が他國から峻嶒大洋等によつて隔てられてゐる場合には、祖國周邊の郷土にも外國との親近性が特に増大する事なく、従つて祖國內のあらゆる郷土は齊しく祖國の一般者に配與しつ

つ只之を郷土的に特殊化するに過ぎない。故にまた茲には先の場合の如き郷土愛と祖國愛との相反が生ずべき蓋然性に乏しく、一に盡す事はやがて他に盡す所以となり、郷土愛と祖國愛とは相互に貫通合體の關係に立つのである。

特定郷土にのみ特別に存在するもの及び祖國に共通なるものの特殊限定が著しい爲に祖國性の稀薄なるものは、また祖國內部の地域的區分及び封鎖の度が高まるに従つて多くなり易い事は明かである。斯かる場合には細分された小地域は外界と有無相通すること少く、故にその内部に於て自ら高度の自足生活を營むに至り、外界従つて祖國そのものに俟つところは少いが爲に、各郷土は祖國に一般的なる祖國的内容に乏しいと共に、祖國に對する關心や愛も亦自ら乏しからざるを得ない。斯くの如き地域的細分及び封鎖は、國家が強力であり統治に積極性を有すれば、國家の統一機能によつて除去され易いのであるが、國家が無力であり或ひは統治の積極性を缺く所には増大して、遂には人は郷土あるを知つて祖國あるを知らず、又は郷土を祖國の如く觀じ諸々の郷土を包括する高次の統一體としての祖國の觀念すらなき狀態をさへも生じ易い。例へば歐洲に於ても國家の權力が衰微して封建領主や都市の割據分立してゐた中世紀には、人は祖國を知らず或ひは斯く分裂對立せる小區劃地域を祖國と感ずるのみであつた。當時ケルン市の住民がケルンを吾が愛する祖國と呼んでゐた如きは、右の事情の一表現に外ならない。又支那に於ても地域的區劃封鎖の度高く、各々の郷土的小地域集團は自治自衛自足の生活を營むに對し、國家は斯かる郷土集團に對して徵稅以外には無爲無關心の態度を執り來つたが故に、人は郷土を重んずる念強く、同郷人は相寄り相結ぶを常とするに對し、郷土の外なる國家乃至祖國は一般人民の關心圈外のものとなり祖國の休戚王朝の運命にも庶民は何等關知せざる有様であつた。支那がその豊富なる人的及び物的資源を以てし

ながら、歐米諸國の半植民地と化してより既に久して、絶えず外侮を蒙り來つた所以のものは、實に支那人が郷土愛を知つて、否之に強きが故に、却つて祖國愛を知らず或ひは之に弱かつた事に存すると言ふべきである。斯くの如き郷土と祖國との疎隔乃至郷土愛と祖國愛との相互背馳の關係は、印度に於て更に一層顯著深刻に展示されてゐる。印度人も古くから高度に封鎖的であり又自律自給的なる點に於て小國家とも云ふべき村落共同體を成して今日に及んだ。各村落には夫々特別な又は特殊性の著しい慣習傳承が成立存続したが、斯かる特別特有なるものを包括し又は此等に内在する全印度に普遍的なるものの發達は見られず、従つて村落を超えた廣い範圍に互る祖國の基礎は缺如してゐた。此の故に印度には國家觀念も祖國意識も發生した事がなかつた。外敵の侵略に對して全印度人が之を排撃して印度そのものを擁護する爲に協力結束せんとする氣運の動いたのは、交通通信の發達によつて封鎖區劃の稍々緩和された最近の事に過ぎない。これ實に印度の侵略が古來極めて容易であり、印度幾千年の歴史は種々の外國の征服抑壓の歴史であつて、商會社さへもよく之を植民地化し搾取し得た所以である。

祖國愛と郷土愛との調和結合の好例はこれを我が國に於て見ることが出来る。我が國は山嶽至る所に重疊し無數の河川四方に注いで、交通を阻害し地域的細分封鎖を強化して居り、又政治上封建的區劃封鎖も永く存続したが故に、各地特有の郷土色は頗る高度に發達した。併しながら國土を繞る海洋によつて外部との接觸交渉は頗る限定されてゐた爲、周邊の津々浦々に至るまで太古以來殆ど専ら國內の他地方とのみ往來し有無相通するに止まり、従つて如何なる土地の文化的特殊相も國內の他の地方と共通なるものを特殊化せるものであり、又は他の地方から嘗て受け入れた儘保存したものであつて、國の外部と共通でありながら内部に對しては特別であるものや、特定地域にのみ局限されて他と全く沒交渉なるものに乏しく、國家も亦無爲放任の態度のみに墮するが如き事は



無かつたのみならず、歴代の天皇は常に只管民を安んずるを以て天業恢弘の要務とし給ひ、仁愛以て蒼生を慈しみ給ふと共に、國民は皇室を太宗とする血族なりとの信念によつて結束されてゐたが故に、祖國的統一の意識又國民一體の感情は如何なる時にも弱まり又喪はれるが如き事は無かつた。但し我が國は外敵の脅威を蒙る事が殆ど無かつた故、祖國意識を明確強烈ならしめるべき否定を経験する機會に乏しく、従つて地域的區劃封鎖の大なる地方や時代に於て、又特に定住性の大なる農民等にあつては、家や郷土の意識はありながら、祖國意識は潜在狀態に在つた事も稀ではなかつた。けれども一度祖國の外と接觸交渉する機會を持つた者には、我が國の歴史と文化の特有性が著大なると共に、自己の郷土又自己自身の全生命も専ら此の特有性に配與し之に根ざすものなる事は、明確に意識に上るのが常であり、更に一度全國土そのものにかかはる事態の發生する時は、如何なる土地に生れた者もその全存在を舉げて祖國に依存する事を即座に意識し、全日本人の祖國愛は一齊に燃え上るのである。此の事は突如として元寇の襲來するや、日頃潜在的であつた祖國意識が全國に澎湃として起り、我が民族の自覺史の上に一時期を劃した事實によつても示されるのであるが、更に明治維新に於ても、諸外國との關係の緊張し來るにつれて、尊王攘夷の高唱の中に、長き封建的分立が大なる波瀾もなしに一朝にして撤去されて、一切が全國的に統一された事も亦、特殊の中に普遍があり部分の根柢に全體の存する我が國の祖國と郷土との關係によるところが尠くない。斯くの如く我が國に於ては、郷土と祖國とが時により機に應じて互に交替して、或ひは前面に現れ又は背後に退きつつ、全體と部分との有機的聯絡と發達とを維持促進して來たのであつた。

近代に於ける交通通信の發達は、人の地域的移轉に對する政治的制限の撤去と相俟つて、郷土的なる區劃封鎖を漸次崩解せしめ來つた。各地に於ける人及び物の出入移動の増大に伴つて、地域的特殊性は減少し、特定郷土の内容をなす特有のものは、或ひは他の郷土にまで普及し一般化してやがて祖國の内容となり、又は他の郷土の

ものの侵入によつて排除されて、自ら減少の傾向を辿るのみならず、更に中央からの統制によつて、あらゆる領域に亘つて積極的計畫的に一定の標準乃至方式を全國に採擇せしめるべく努める事多く、同時にまた時代の進展に伴ふ開發や施設によつて、郷土の古い記念物等の破壊も免れ難く、郷土は次第にその特殊内容を喪失しつつある。郷土と祖國とが背反の關係にある所に於ては、斯かる郷土特有の内容の衰頹はやがて祖國に共通する内容の増進を意味する事となり、従つて祖國の強化となるは上述したところから自ら明かである。近代西洋に於ける祖國意識従つてまた民族意識の成立發達は、斯かる祖國の強化によるところ多大であつた。併しながら夫々の地域には何れも自然環境及び生活事情の差異又歴史的傳統の個別性がある。此の地域的な差異や個別性への適應を忘れ又は無視して、一樣なるものを全國に機械的に課する事は、各地の生活の自由にして力ある機能を抑壓拘束し、又その情趣と潤ひとを剝奪し枯渴せしめる結果となり、従つて祖國内容を却つて空疎にして精彩なく活氣に乏しいものたらしめる憂がある。此の點に鑑みて近時郷土擁護の運動が西洋諸國に起つて來たのは、現代各方面に見られる抽象的普遍者の支配に對する具體的特殊者の自己主張、また機械的整一性の跋扈に對する現實的多様性の抗議の一表現と言ふべく、人間及び社會の地域的限定よりする當然の現象と見られよう。但し郷土の擁護は郷土の舊態維持にのみ終止すべきではなく、時勢の進運に應じて郷土の發展を計る爲に、新たな様式文物を外界から攝取すべきは勿論である。ただその際郷土の特殊性をよく認識し、之に適合するやう限定を加へることを怠らず、斯くて郷土の一切のものをして、その個別的なる本性に従つて夫々の眞生命を遂げる事によつて祖國的普遍者の充實伸張に貢獻するところあらしめるべき用意を、常住に喪はざる事が肝要である。斯くてこそ郷土的なるものと祖國的なるものとは相互に調和補充し合ひ、郷土愛と祖國愛とは相互に支持強化し合つて、部分なる郷土と全體なる祖國とは相共に生々發展の途を進み行くであらう。